

## —転出のご挨拶と一哲学会の思い出—

大河内泰樹（京都大学文学研究科教授）

私は2019年10月に、9年間お世話になった一橋大学社会学研究科を離れて、京都大学文学研究科に異動いたしました。一哲学会には学生時代（≒研究会時代）からあわせて24年ほどお世話になってきたこととなります。会員のみなさまには、ご報告が遅れて申し訳ありません。

多くの会員のみなさまにとってはいまさらかもしれませんが、少し一哲学会の歴史を繙いてみますと、私が院生として一橋に来た頃は、研究会を名乗っていました。発足は私が入学するより前のことですが、普段なかなか接点のないゼミ間の交流のためにはじめられたと聞いています。HPに研究会時代の報告者と報告タイトルが上がっていますが、哲学・社会思想にとどま

らず社会学なども含めて、今一線で活躍されている名だたる方々が報告されていたということがわかります。私自身学生時代は、正直いうとなんとなしに参加していたのですが、いまさらながらとても貴重な場所であったことが分かります。（なんとなくといっても、もちろん研究会で交わされる先生方先輩方の議論にはとても刺激を受けていました！）

院生の業績が求められる傾向が強まったことから、2007年に学会化しましたが、一哲学会という素敵な略称はたしか新川さんが提案されたものだったかと記憶しています。私は留学中だったと思いますが、メール上の議論を拝見していた記憶があります。時期は学会化より少し後だったかと思いますが、それまで会員の研究報告だけだったのが、シンポジウムなども開催してより学会としての形を取るようになってきたのも学生さんの主導によるものでした。

学会になってから、メンバーもまた移り変わりましたが、現在に至るまで多くの有意義な企画が行われています。私は一橋に着任してすぐにヘーゲルのコルポラツィオン論について報告させていただいたのですが、このフランス語由来の概念について大変有意義な示唆を森村先生はじめみなさまからいただいたのを思っています。またここ数年は、井頭先生が主導しての分析哲学系の企画で、多くの学外からのお客さんたちも集めるようになってきており、一哲学会の活動も広がりを見せています。

この10年ほどの間に岩佐先生、島崎先生、山崎先生、平子先生が退官され、また古茂田先生が亡くなられるという悲しい出来事もあり、教員メンバーも大きく入れ替わりました。その中、森村先生と並んで研究会時代からの一哲学会を知る者として、おこがましくもいつてしまえば、今後の役割を期待されていたかと思うのですが、それも果たせず申し訳ないと思っています。最近では加藤先生も退職され、教員メンバーは森村先生と井頭先生のお二人となり、ご負担も大きくなっているかと思えます。また教員だけでなく、学生のみなさんに運営を依存する割合もこの間増えてきていました。

しかしさらに誰よりも、この一哲学会の最大の貢献をしてくださったのは助手の干場さんではないかと思えます。院生時代から教員時代までずっと、干場さんにはお世話になってきました。その干場さんも、今年度でご退職とうかがいました。まだ少し先ですし、またそれまでにご挨拶する機会もあるかと思えますが、この場を借りて学生として教員として長年お世話になったことについてお礼申し上げたいと思えます。

大学と人文・社会科学に向けられている世間の視線は、特にここ最近暖かいものとはいえません。その多くは先入観や思い込み、あるいはデマにさえももとづくものですが、まさにそうした時代であるからこそ、哲学・思想から現代社会についてちゃんと地に足の着いた研究を積み重ねていくことの重要性はむしろ高まっていると感じています。文学部に異動してきて、いちばん感じるのは一橋の哲学・社会思想には、常に社会的問題関心が生きていたということです。その意味で、一橋の哲学・社会思想はいまこそ必要ですし、私は文学部という場所ですこしでもそうした社会と哲学を架橋する一橋の精神を継承する研究と教育ができればと思っています。

職場が一橋から離れてしまったとはいえ、私も卒業生として引きつづき会員ですので、みなさんにお会いできる機会もあろうかと思えます。この会報も今回で残念ながら最後とのことですが、コロナ禍も収まりまた一橋のキャンパスでみなさんとお会いできること、そして議論できることを楽しみにしています。最後にあらためて、この一哲学会を長年応援していただいたことについて、かつての教員メンバーのひとりとしてお礼申し上げます。そしてまたこれからも応援をよろしくお願いいたします。